

## ■はじめに

8 月 21 日、読売新聞の一面に「教育 AI で個別指導 文科省実験へ つまづき解析」という見出しで EdTech<sup>※1</sup> についての記事が掲載されました。記事では、これまで教員の目配りや経験値で発見してきた子どもの学習面でのつまづきを、AI の導入により、経験の浅い若手教員でも一人一人にきめ細やかな指導をしやすくなることが期待される、といった内容を報じています。このように、これからは教育に AI や IT を活用した学びが、当たり前のように進められていくことになります。



AI を使った個別学習は、奈良市では「学びなら」として、すでに 2 年前からスタートし、今年は全小学校の 4 年生、5 年生で取り組んでいます。校長がこのことについて理解を深め、それぞれの学校の中で学校組織として進められているのか、考える機会としてほしいと思います。

※1 Education と Technology をかけ合わせた造語で、教育の現場に AI やビッグデータ等の新しいテクノロジーを持ち込んで活用する取組。

## ■ミネルバ大学にみる「未来の学校」の姿

7 月の校長会では、経済産業省の『未来の教室』と EdTech 研究会の第 1 次提言<sup>※2</sup>を受けて、「未来の学校」の例を紹介しました。このような「未来の学校」の姿を夢物語のようにとらえている人もいるかもしれませんが、実はすでに世界には存在しているのです。それがミネルバ大学です。

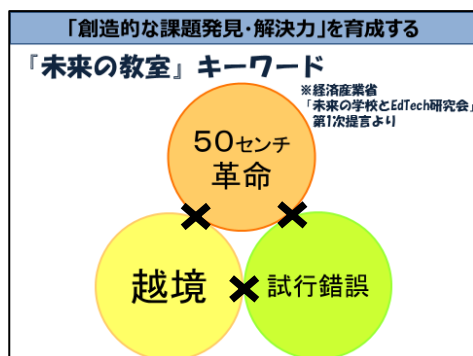
ミネルバ大学は、大学としての校舎を持たず、学年や学期ごとに滞在拠点を移して学ぶ全寮制の 4 年制大学です。午前はオンラインを使ったディスカッション型の授業を受け、午後は各都市でインターンとして活動したり、行政、NGO、企業などとともに社会やビジネス課題の解決に取り組んだり、あるいはパブリックスピーキングをする、地域の活動に参加するなど、実社会での経験を通して学んでいきます。その国その街の課題と向き合い、「どこに就職したいのか」ではなく「自分は何に貢献できるか」「どのような問題を解決したいか」を考え、どの職業に就いてもリーダーとしての役割が果たせるような、実社会につながる学びをしているのです。

奈良市では「未来の地図を描き、自ら前へふみ出す力の育成」というスローガンの中に『教え』から『学び』へ」という授業改善の視点、「教室と社会をつなぐ」というキャリア教育の視点を挙げていますが、ミネルバ大学の学びはその究極の姿であるといえます。

※2 経済産業省ホームページ『未来の教室』と EdTech 研究会の『第 1 次提言』がまとまりました

<<http://www.meti.go.jp/press/2018/06/20180625003/20180625003.html>>

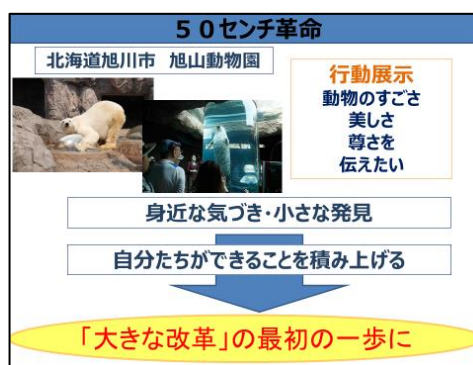
## ■「未来の教室」のキーワード



経済産業省の『未来の教室』とEdTech研究会では、「これからの社会は予測できないことが加速度的に起こり、未来社会は必ずしも現在の延長線にあるとは限らない」ということを念頭に議論されています。そして、これからの教育は「創造的な課題発見力と解決力を育成」することが大切であり、そのために「50センチ革命」×「越境」×「試行錯誤」が必要だと提言されています。

### ・「50センチ革命」

「50センチ革命」とは、身の回りにある小さな気づきを「大きな革命」の最初の一歩に変えるというものです。「行動展示」によって人気となった旭山動物園がその一例です。「行動展示」とは、動物の生態や能力を見せる展示方法です。動物の魅力は、飛ぶ・泳ぐ・捕食するといった、動物が行動を起こす瞬間にあります。このような瞬間に表れる「すごさ・美しさ・尊さ」を伝えたいという飼育員の思いから「行動展示」が始まりました。



そのきっかけは、飼育員が鳥のことを調べているときに、「鳥に餌をあげようと果物を置いたら、野生のアカハナグマに先に食べられてしまった。ロープにつるすなどの工夫をしたが、ことごとくアカハナグマに取られた。」というエピソードを知ったことにありました。その飼育員が「この行動こそがアカハナグマのすごさだ。」と思い、園内のアカハナグマもその行動ができるように「行動展示」し、大きな人気を呼ぶこととなりました。

このようにちょっとした身近な気づきや小さな発見から、自分たちができることを積み上げ、それが全国の動物園の仕組みやあり方を変えるような変革に結びついたのでした。

### ・「越境」

「越境」とは、「異なる分野、異なる人と関わる」ということです。軽井沢にあるインターナショナルスクール ISAK（アイザック）は 2014 年に開校した全寮制の国際バカロレア認定校です。ISAK 代表の小林りんさんは、学校設立の思いを「社会を変革する人を育てたかった。」と語り、次のようなエピソードを紹介しています。

様々な国から生徒が集っているため、国によって「きれい」の概念が違い、寮のキッチンの掃除当番がうまくいかないことがありました。そのような時に教師がすることは「生徒の話し合う場をつくること」だけです。生徒は話し合いの中で、「皿は洗う。」「シンクにゴミがないようにする。」「濡れたままにしない。」というように、誰が見ても分かる事実を共有し、ルールをつくりました。

多様な国の生徒が集まる中では、自分の「当たり前」が通じません。生徒は自分の「当たり前」を疑い、話し合いの中から自分たちで解決策を見つけ、新しいものをつくりあげていく経験を日常生活の中で積み重ねていくのです。「越境」とはこのような体験のことです。

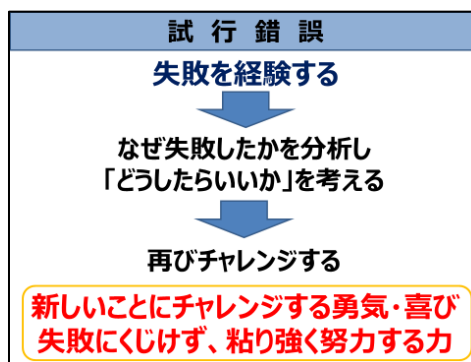
また、ISAK には、睡眠時間の確保のため、午前 0 時から 5 時まで Wi-Fi を使用禁止するという校則がありました。しかし、海外にいる家族と話をしたいという生徒からの提案があり、話し合いを経て、その校則は廃止されました。このような体験は「越境」が「50 センチ革命」につながった例といえます。「当たり前」を疑い、自分のちょっとした発見・気づき・違和感から課題を見つけ、その解決に向けて周りを巻き込んで行動し、身近で小さな気づきを最初の一歩とした「変革」です。

### ・「試行錯誤」

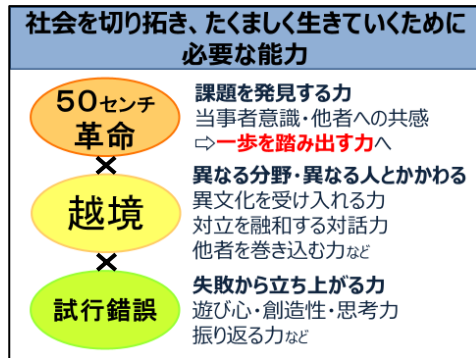
「試行錯誤」については、誰もが理解できることだと思いますが、実はこれも日本の教育の課題の一つです。

これまで私たちは決められた授業時間の中で一つの学びが完結するように努めてきました。綿密に練られた授業計画、効率的な学習の流れは、日本の教育が積み上げてきた大切な財産ですが、そのような授業の中では「失敗を経験し、なぜ失敗したのかを

分析し、どうしたらいいのかを自分で考えて再びチャレンジする」という経験をあまりしてこなかったのかもしれない。失敗しないよう先回りして障害を取り除く。失敗事例を先に伝えて失敗しないようにする。失敗してもなぜ失敗したのかを「教えて」成功に導く。このような教育の結果、子どもたちは失敗から学ぶことが少なくなりました。失敗にくじけずに粘り強く努力する力を身に付けさせるということは、私たちの教育の中で不得意としてきたことではないかと思います。



## ■社会を切り拓き、たくましく生きていくために必要な能力



先ほど紹介した「50センチ革命」×「越境」×「試行錯誤」がこれからの教育を推進していく時の大切なポイントとなります。これらのキーワードを意識した取組の中で育まれる力は、これからの社会を切り拓き、たくましく生きていくために必要な能力です。この力は、幼児期から意識し、育まなければなりません。そのためにも先生方が持っている身近にある小さな「気づき」から「変革」を進めていくこ

とが大切です。

奈良市では、「未来の地図を描き、自ら前へふみ出す力の育成」をめざしていますが、これは身近なところに課題を見つけて一步を踏み出す「50センチ革命」を「越境」や「試行錯誤」を通してやり遂げようとする事だと思います。閉じられた教室の中だけで完結するのではなく、社会とつながり、豊かな実体験を伴いながら学んでいくという学びが、これから求められる教室の姿です。